

書肆えん通信

No. 8

2021・12・25
書肆えん
秋田市新屋松美町
5-6

高尾神社扁額俳句のその後

長谷部清一

〔前略〕

出句者二十五人のうち五人の出身地は判明しているが残り二十人の出自について知っている方に連絡を呼びかけておいたところ、記事になった晩、電話連絡があり、この掲額の催主者である「一花」の出身が判明した。

石井露月研究会員の露月俳句観賞講座の常連で、現在秋田市在住の伊藤正祥氏が曾祖父の伊藤房松がその人ではないかと名乗りを上げてこられた。

伊藤房松翁の戒名が義壽院一花春性居士と俳号が刻まれているという。(ちなみに正祥氏の父も俳号「柿紅」で戒名に刻まれている。)

伊藤家は、種沢が出身地で同地の大地主伊藤惣兵衛

高尾神社扁額俳句のその後……………長谷部清一…1
露月 芭蕉 子規……………工藤 一紘…2
「新雪」と悠心俳句会……………伊藤 正祥…7

〔宗家〕の第一分家であると言う。

伊藤惣兵衛といえは明治維新の廢藩置県後の、近郷政界には隠然たる力を持つ大人物で、伍長総代は勿論、その後の種沢村外五ヶ村戸長役場の官選戸長、更に明治二十一年四月の町村制の公布の折、官選戸長の立場から六ヶ村(種沢、平尾鳥、左手子、相川、戸賀沢、女米木)の単位とする立村を主張、結局その案が取り入れられ「中川村自治制施行許可が、明治二十二年四月一日に出」中川村が発足した。勿論、伊藤惣兵衛が村長となった。

新発足の村が最初に取り組んだのが共有財産及負債の処分についての協議で、共有財産整理協議委員として種沢村より、加藤専太郎、伊藤房松が選任されている。伊藤村長の側近であったであろう、伊藤房松の抜擢は当然であったことと思う。

当然、経済的に恵まれていた一花が、秋田を中心とした俳人たちを糾合して、高尾神社への扁額奉納した

ものと考えられる。

伊藤氏宅には、河東碧梧桐筆の掛軸があり、明治四十年碧梧桐が女米木来訪した折、一花も歓迎句筵に参加し、その折に揮毫して貰ったものではないかと、期待している。

明治三十五年、露月邸を会場に、荒木房治（女米木小学校校長、鶯郷）が幹事役の洪柿会という俳句結社³つくられた。この会には新波、小種などの俳人と共に、種沢より伊藤寛（宇佐見）加藤重治（矢風）伊藤秀一（秋逸）伊藤政司（静史）加藤専蔵（種山）加藤天朗（天朗）伊藤忠一（翠江）川尻忠一（不撰）川尻忠蔵（寛海）の九人が名を連ねている。

明治四十年四月の洪柿会五句集「霞」に出句する者の中には種沢の宇佐見、静史、種山、矢風、翠江、寛海、不撰の七人がみえる。

同年七月三十日の碧梧桐来訪の記事は『三千里』に碧梧桐が書いているが、全体像は省略されている。

茲に加藤純江が「女米木の思い出」という文があり、碧梧桐女米木訪問を紹介している。（青雲98号）

「山上、村社舞殿の平地に酒を運び飯を炊き、川鱒を切つて歓迎の小集を催す。会する者碧梧桐、露月、鶯郷、耕畝、種山、静史、矢風、禾村、梅

仙、柚釜、純江。雨乞、蟬二題十句、互選あり、山下川向ひの里に灯ともる頃下山す。……とあり、種沢よりは三人の参加である。

又、碧梧桐訪問時の句稿が荒木房治校長関係者に保存されており、課題吟雨乞、蟬、御祓川、夏菊、初秋などの句が確認できるので、伊藤氏宅保存の碧梧桐筆と照合できれば繋がりの有無が確かなものになるのではないかと考えている。

〔女米鬼〕一〇二号、平成二十四年一月十日発行より

露月 芭蕉 子規

工藤 一紘

一、高尾神社への俳句扁額の奉納と催主・一花

露月生誕地、女米木高尾神社里宮の拝殿に、明治二六年六月八日奉納の俳句扁額があり、この中に露月の秋田中学時の一句

夕立のわするものらし松の月

が『露月全句集』九二九一句には収録されていない露月新出句であることで大きな話題となった。（平成二十三年九月十三日、十四日付・秋田魁記事と長谷部清一稿）作句年代別『露月全句集』（平成二二年三月

秋田市雄和図書館刊）刊行によって生まれたドラマと
いえた。なぜなら、扁額の存在そのものは以前から長
谷部氏の知るところであつたからだ。新出句であるこ
とは二年三カ月（平成二十一年三月～二十二年六月）
に及ぶ「露月俳句鑑賞講座」の中で確かめられたもの。
『露月全句集』は露月が子規と従遊した明治二七年
春から昭和三年九月の没までを作句年代別はもちろん
五十音別、季語別に分類したデジタルデータCD付き
の事業で、中心的役割を果たした人は超雲吟社代表伊
藤義一氏であり、その後エクセルを付与した人が雄和
古文書研究会の柏谷勉氏であつた。もちろん底本は露
月没直後に草稿を筆写整理した加藤純江、加藤凡化に
よるもの。

扁額の存在が長谷部氏によって女米木文芸協会が発
行する地域発信誌『米女鬼』（百一号・平成二三年八
月十日発行）に発表された時、奉納の年が明治二六年
であることに熱い視線を送った人がいた。子規研究者
の和田克司氏である。明治二十六年は芭蕉没二百年に
あたり、子規は奥羽へ旅「はて知らずの記」で秋田を
訪ねた年であり、またこの年の秋には二十歳の露月が
青雲の志を抱いて上京した年であつた。

奉納した俳人二十五名は石井露月、安藤和風、布川

銀海、佐川山色など以外は知られていない。今後、奉
納句の俳人らの経歴が判明すれば明治中期の秋田の俳
壇地図が明らかになるものと期待される。

慶応二年生まれで私立東京商業卒業二年目の和風は
二十八歳、吉川五明門下の佐川山色（やまいろ）は「古
今秋田英名録」によれば河辺郡船岡の人で文化年間生
まれとあり、八十歳前後と思われる。布川銀海は露月
とは生涯にわたつて交遊のあつた俳人である。長谷部
氏は新聞紙上で「奉納扁額に登場する俳人の経歴につ
いてご存知の方がおられれば、ご高配を賜りたい」と
呼びかけた。中でも扁額を主宰した催主・一花の経歴
が分かれば全体像が見えることから、特に一花への関
心が高まつていた。

事態は意外にも我々の近くで急展開した。石井露月研
究会員で友人・伊藤正祥氏の曾祖父Ⅱ初代・伊藤房松
がその人でないかと名乗り上げられたのである。一
花は戒名に義壽院一花春性居士と俳号を刻んでいた。
俳人一花こと伊藤房松は嘉永二年（一八四九）十月
二十七日生まれ。ペリーの黒船来航の四年前のこと
である。明治四三年（一九一〇）二月二十三日逝去（享
年六二歳）、旧種沢村太子前二〇八（現秋田市雄和太
子前）の人である。

河東碧梧桐が「三千里の旅」の途次、露月山廬を訪ねたのは明治四十年夏（七月二十九日～八月二日）、七月三十日には高尾山で、露月が按配した膾を葡萄の葉に盛り、酒でもてなす十四人の歓迎句会が開かれた。翌三十一日には女米木小学校グラウンドの青天井の下で晚餐を兼ねた十数人の小集があった。一花房松は、いづれかに同席したと思われる（だが碧梧桐の『三千里』には名前はでていない）。その折、拝領したとみられる碧梧桐直筆の六朝風の一幅「辻能の班女が舞や夏柳碧」が今日伊藤家に秘蔵されている。伊藤家は種沢村の大地主・伊藤惣兵衛の第一分家で二代目（祖父）恵一、三代目正夫は正祥氏尊父・元校長（戒名・大徹院正學柿紅居士）で初代と三代目は俳人でそれぞれ俳号の「一花」「柿紅」を戒名に刻む。伊藤正祥氏は四代目で俳句を愛する元校長という家系である。正祥氏の証言によれば、伊藤家は惣兵衛家系でありながら、なぜか露月の母ケンの実家平四郎家と仲がよく、正祥氏も幼少期平四郎家に預けられることが多かったという。露月と平四郎一家との親密さを考慮すると、惣兵衛の政治力を除いても、俳人一花として碧梧桐歓迎句会に招待を受けたであろうことは十分に推察される。扁額に刻まれた一花の二句について和田氏の識に従っ

て紹介してみたい。

柳にもふかぬ風あり薄羽織 一花

夏羽織を着てみると、柳に風が吹かぬほどの様子から、いかにも涼しい。大旦那の薄羽織がまぶしいのかな光景である。

暮れぬから海の上なり夏の月 一花

「暮れぬから」にて、「暮れるか暮れぬうちに」の意味になり、海上に月が出た光景。通例ならば東海の光景ながら、催主として、一つは室内、家の周辺の光景を詠んで、ゆとりある風情を強調し、一つは大きな光景で夏の句ながら、秋の豊作を祈念する気持ちが込められているような気がする。「大旦那の薄羽織」の一句はいかにも、伝えられる曾祖父Ⅱ初代・伊藤房松のイメージ通りだと、正祥氏は感心することしきりである。

明治二六年（一八九三）は一花四四歳である。五明門下の佐川山色などの大先輩の中で一花が何故催主としてリーダーシップをとる位置にあったのか、興味は尽きない。

〔後略〕

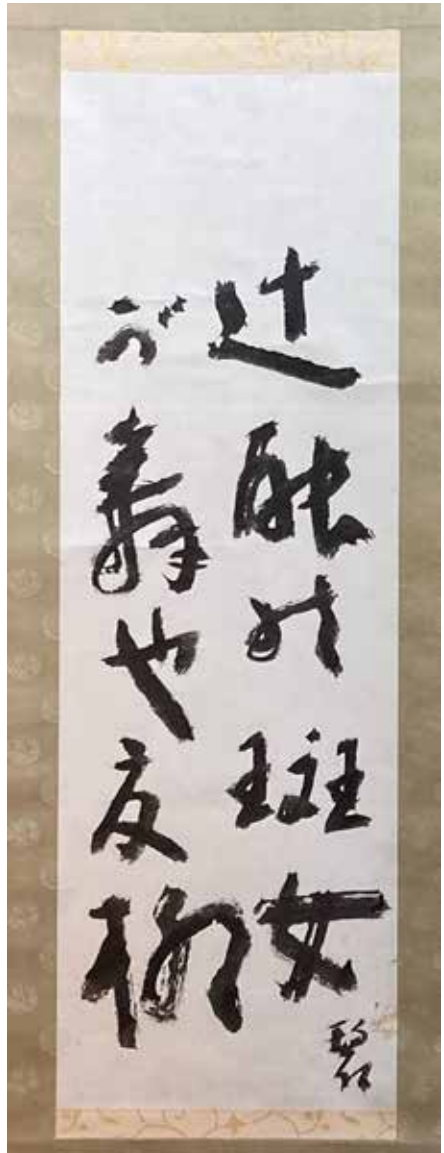
〔女米鬼〕一〇二号、平成二十四年一月十日発行より

辻能の斑女が舞や夏柳 碧

「田舎のみちばたで、田舎巡りの楽団一行が日本芸能の一つである能楽を演じている。周りには農民たちが集まり拍手喝采をしたりしながら興味深げに眺めている。」

その楽団が演じている様子が能舞台の『班女はんじょ』と重ね合わさっている感がある。

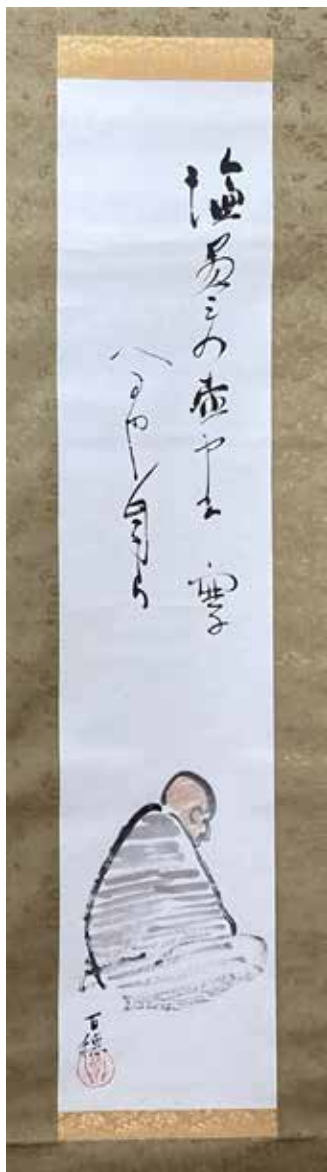
おりしも今を盛りと夏の柳がさわさわと揺れ動いて



伊藤正祥氏蔵

いる。」

河東碧梧桐は、明治四十年七月二十九〜八月一日、石井露月邸宅に滞在。「露月日記」はその部分を焼失しているが、碧梧桐の『三千里』の記録で推測すると、句会を高尾山と戸米川小学校校庭で開催。一花の名前は見当たらないが、年齢を考え、掛け軸は、一花が手にしたと考えたい。(伊藤正祥)



伊藤正祥氏蔵

塩蓼の壺中にへるや自ら 虚子

明治四十三年八月二十一日、正岡子規の後継者と目されていた高浜虚子が、女米木にやってきた。その日の「露月日記」には、「二十一日晴、虚子、百穂、松圃ノ五人、車ヲ連ネテ来ル。午後四時、山ニ上リ写真、スケッチ等」、また「夜、皆々揮毫等、十二時ニ至ル、車夫等、本家ニ泊ル」とある。この時、書かれた作品がこれと推測される。

「露月はどういふ心持で余を待つてゐるだらうかとか、或はどんな風體をして余を迎へるだらうかとかいふやうな事よりも昔は東京で共に俳句を作り共に酒を

飲み共に「一度は衆議院議員にもなつて見度いね」「僕も一度はなつて見度いと思ふ」など、言ひ合つた友達が多餘年間此秋田の山中に隠れてゐて一度も東京に出て來ない、手紙も年始状以外には餘り遣り取りもしない、其友に、遙々二百里の道を來て、今日は秋田から更に六里の野道をして逢ひに行くのだと思ふと何となく心が躍るのであつた。」

〔高濱虚子「露月を女米木に訪ふの記」『高濱虚子全集』(改造社)より〕

この年、虚子は三十六歳、百穂は三十二歳、露月は三十七歳であつた。(伊藤正祥)

「新雪」と悠心俳句会

伊藤 正祥

平成元年、県教育関係退職者互助会の協力で悠心俳句会ができた。当時指導に当たられた熊谷詩城氏は「新雪」の主宰者でもあったので、悠心句会は弟分にあたりとお聞きしていました。

六月上旬、米屋道子代表から「新雪」は十月の四二〇号で終刊との連絡がありました。全く衝撃的で言葉もなかった。「新雪」には悠心俳句会の句を掲載してもらい、とても有難く感じております。

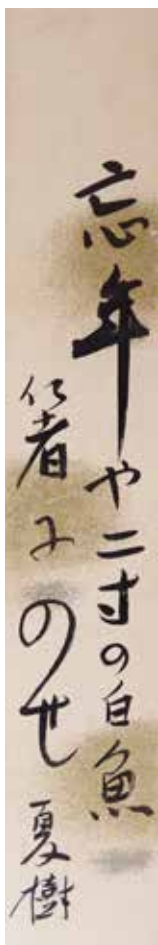
木村登龍氏の「一句鑑賞」や佐々木ミツエ氏の「月例俳句を見る」などのお二人の暖かい評は、いつも敬意を持って拝読しておりました。

電話だけでしたが、米屋道子氏とは勿論、一ノ関仁

志氏や松山露州氏とも親しくお話をさせて頂き、その都度適切なアドバイスを頂戴しました。また米屋氏からは磯崎夏樹氏の短冊を頂き、突然だったので大変驚き、また感激いたしました。七月の句会で悠心会員に配布いたしました。

私は「忘年や二寸の白魚」を頂戴いたしました。早速床の間に飾り鑑賞しております。米屋氏が磯崎夏樹氏のご息女とはつゆ知らず、「お会いしたことがありますか」などと質問をしてしまいました。汗顔の至りです。夏樹氏の句碑は千秋公園内にあり、熊谷詩城氏が建立なされたことも初めて知りました。公園の散歩に楽しみが一つ増えました。

私は平成十七年に悠心俳句会に入会しました。以前同職した土田兼人氏や雄和の種平小学校での恩師進藤市太郎先生（進藤白楊）も会員でした。特に恩師進藤先生とご一緒できることを楽しみにしておりましたが、



間もなくご逝去なされました。とても悔やまれます。小学五年生の頃進藤先生から俳句の授業を受けました。「秋晴れの五郎兵衛沢に石ひろい 正祥」。記憶に残る私の唯一の俳句です。

数年前熊谷詩城氏建立の石碑があると聞き、男鹿の入道崎を訪れました。それは「新雪」門流の祖・大須賀乙字師の句碑でありました。師を重んずる熊谷氏の熱意を見たような気がしました。大須賀乙字師らの「新雪」のルーツについては、通巻三七六号に記されています。

私が入会した当時の会員は二十数名でしたが、今や五名ほどになってしまいました。存続が危ぶまれる状況となりました。

俳誌「新雪」は七十数年の長い歴史を閉じることになりました。携わった方々の心情を思うにつけ、無念でなりません。また明治三十三年、石井露月氏などで創刊の「俳星」も、平成二十七年に休刊になっています。

秋田県の俳誌界はとても寂しい限りです。新雪句会は続くようです。楽しみにしております。常に私たちの道しるべ的存在で、たくさんの刺激を受け、心地よい時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。

〔「新雪」終刊号（通巻四二〇号）、令和二年十月十日発行〕

【後記】

『蟬時雨』の跋文で紹介されていた「女米鬼」一〇二号から、著者の曾祖父や、碧梧桐の掛け軸にふれている長谷部清一氏と、工藤一紘氏の論考を転載した。ただし、伊藤総兵衛については、伊藤惣兵衛に訂正した。

また、「新雪」については、「あらゆる」とよんでいた時代、秋田文化出版社で印刷していたので、磯崎夏樹さんの勤務先の平野井木材工業株式会社に校正をもっていったことを思い出す。（J）



折り紙アート「水仙」
伊藤博子氏作